

■ ウズベキスタンとの拠点交流事業の実施

7月24、25日にウズベキスタンから5名の研究者が来所しました。これは7月20日～30日に実施した、文化庁から受託している文化遺産国際協力拠点交流事業の一環で、昨年度に引き続き2回目かつ、新型コロナウイルス感染症が落ち着いてから初めての長期の研修でした。サマルカンドとタシケントから参加した皆さんには、この機会をとても楽しみにしていたようです。研修の目的は遺跡から出土した遺物や動植物遺存体の採取・分析・保管の方法について掘り下げることで、北海道、岡山、奈良、熊本、福岡、山口の各研究施設を回り、化学分析装置などの研究設備の見学や研究者とのディスカッションをおこなうなど、盛りだくさんな内容でした。

奈良文化財研究所では、平城地区環境考古学研究室、飛鳥・藤原地区考古第一、二、三研究室を訪問しました。環境考古学研究室では、約6,000年前の縄文時代前期の遺跡から見つかったマグロの骨格標本と3Dプリンターで出力した背骨の複製の説明を受けて、推定体長2.5mもあるマグロの大きさと、捕獲した縄文人の技術力の高さに驚いていました。参加者から寄せられた、日本での人骨の出土例が少ないのはなぜかという質問には、山崎室長から、日本は火山灰由来の酸性土壌により骨が残りにくいとの説明がありました。ウズベキスタンの土壌は乾燥していて骨は比較的残りやすく、サマルカンド考古学研究所でも多くの古人骨標本を収集しているそうです。また、遺跡で出土した動物骨を同定するためには、同じ地域内で比較対象となる現生標本の製作



マグロの骨格標本の説明を受ける様子

が必要不可欠であるという話も聞き、ウズベキスタン国内で標本を集めていく必要があると話していました。さらに、こうした研究の方法や成果を一般向けに公開していることも同研究室の特徴で、サマルカンドでも新たに建設予定の博物館で同様に普及活動を試みたいとのことです。

飛鳥・藤原地区では考古第二研究室の山藤主任研究員から、3Dスキャナを用いた遺物の実測方法や藤原京で出土した7世紀末の瓦の説明を受け、保存修復科学研究室では、田村主任研究員から蛍光X線分析装置とX線回折装置による文化財調査のデモンストレーション、ポリエチレンリコールを用いた木製品の保存処理方法について説明を受けました。午後は参加者5名と、平城地区考古第三研究室の川畠主任研究員、飛鳥・藤原地区考古第一研究室の谷澤研究員が自身の研究分野について発表をおこない、情報交換しました。研修参加者には中世の武器・鉄器、ガラス製装飾品専門の研究者がおり、活発な議論を交わしました。

今回の参加者には若手の研究者も多くいましたが、ウズベキスタンでは考古遺物の科学分析分野はこれからまさに発展していくところなので、自分たちには後進のために大きな責任があるとの意見が出していました。そのために、国外の研究者と多く情報交換し、最新の研究手法・技術・制度を積極的に吸収したいという彼らの意気込みが感じられ、同世代である私自身も大変刺激を受けました。今後も拠点交流事業は続きますので、国際遺跡研究室では彼らと一緒に、ウズベキスタンと、日本を含む諸外国とをつなぐ役割を果たしていきたいと思います。

(企画調整部 篠原朋与)



情報交換会の様子